9-1 水利用

琵琶湖の水は、滋賀県だけでなく、京阪神地域を支える重要な水源として、上水・工水・農水・発電など様々な目的に利用されています。戦後、産業経済の発展等により、京阪神地域を中心に水需要が急増したことから、琵琶湖総合開発などの水資源開発が行われてきましたが、近年の社会経済情勢の変化から、これまでのような使用水量の増加はみられなくなりました。しかし一方で、渇水のリスクは高まると予想されており、日頃から琵琶湖淀川流域の住民が一体となって、水を大切に使うことが望まれます。

1．琵琶湖は貴重な水源

琵琶湖は、水道用水、工業用水、農業用水、発電用水などの水源として、滋賀県はもとより日本経済の中核を担う京阪神地域を支える重要な役割を果たしています。

琵琶湖の水は、西は神戸市、南は大阪府南端の岬町まで広く利用され、水道水としての水利用人口は約1450万人にのぼっており、琵琶湖淀川の流域内だけでなく近畿圏の多くの人々がその恩恵を受けています。

また、琵琶湖は滋賀県の1/6にあたる広大な水面積を有し、淀川水系の集水面積の約50%を占めることから、淀川水系の利水計画上重要な存在となっています。

2．琵琶湖の水利用の歴史

歴史を振り返ると、1890(明治23)年には、琵琶湖第1疏水が完成し、わが国最初の水力発電をはじめ舟運、農業用水などの多目的な利用が始まり、1912(明治45)年には上水道、発電の拡張等を目的とする第2疏水が完成しました。続いて、宇治川においても、宇治発電所が建設されるなどの水力発電開発が行われ、いずれも今もなお社会生活において重要な役割を果たしています。

その後、産業経済の発展に伴う水需要の増大などに対処するため、1943(昭和18)年から1948(昭和23)年にかけて、淀川河水統制第一期事業が実施され、琵琶湖の水位調節による水利用が始まりました。

昭和30年代後半以降の高度経済成長の下で、京阪神地域は水需要をさらに急増させたため、1972(昭和47)年から1997(平成9)年までの25年にわたる琵琶湖総合開発事業をはじめとする水資源開発が実施され、水利用の安定化が図られました。

3．水利用の変化と渇水

しかし現在では、少子高齢化社会の到来による人口の減少や、節水機器の普及、環境意識の高まりや企業のコスト削減等の取組により、水の使用量が減少しています。農業用水についても灌漑面積の減少、機械化による営農形態の変化、用排水の分離などにより水利用の実態が変わっています。

その一方で、気候変動の影響による異常少雨の発生等によって、将来の渇水リスクは高まると予想されています。

深刻な渇水になると、琵琶湖淀川からの取水の制限、船舶の航行への支障、水草の腐敗による悪臭発生などの日常生活への影響や、琵琶湖の貴重な生態系への影響など、様々な問題が発生することから、滋賀県民だけでなく、琵琶湖淀川流域の住民が一体となって、日頃から節水に取り組むなど、節水意識の向上が期待されます。

図9-1-1　琵琶湖の水利用区域

琵琶湖政策課